

### C. 文学 I (企画) 企画者：赤松美和子 (大妻女子大学)

テーマ：台湾文学・映画における日本表象と日本文学における台湾表象の相互性

座長：白水紀子 (横浜国立大学)

報告 1：小笠原淳 (熊本学園大学)

戦中戦後の日本語文学に見る台湾「蕃地」と先住民女性

——真杉静枝、坂口禰子、津島佑子の描いた「蕃地」のロマンスと現実

報告 2：赤松美和子

戦後台湾映画における日本時代表象

報告 3：劉靈均 (神戸大学院生)

朱天文・朱天心の日本表象と同性愛—1990年代の作品を中心に

討論者：垂水千恵 (横浜国立大学)、張文菁 (早稲田大学)、三須祐介 (立命館大学)

本企画は、台湾文学・映画における日本表象と、日本文学における台湾表象の相互性について、重層的に考察しようとするものである。現代文学のみならず、戦前（植民地統治期）の作品、或は現代日本・台湾において戦前の歴史記憶を再表象した作品も分析対象とすることで、表象の歴史的重層性を追求することを目的としている。

報告 1 「戦中戦後の日本語文学に見る台湾「蕃地」と先住民女性」では、佐藤春夫「霧社」(1925)以来、一世紀近く描かれ続けてきた台湾「蕃地」の物語に光をあてる。真杉静枝「蕃女リオン」(1941)、坂口禰子「蕃婦ロポウの話」(1960)、津島佑子『あまりに野蛮な』(2008)を取りあげ、異なる時代の小説テキストにおいて台湾「蕃地」と先住民女性を見つめるまなざしの移り変わりを考察する。

報告 2 「戦後台湾映画における日本時代表象」では、台湾映画が日本時代をどのように描いてきたのか通史的に分析する。魏徳聖『セデック・バレ』(2011)・『KANO』(2014)等現代台湾映画において日本時代は創作源となっている。台湾ニューシネマ以降の作品は比較的研究が進んでいるが、本報告では、それ以前も含めた戦後の台湾映画における日本時代表象を、日台のみならず二つの中国との相互関係も視野に入れて考察する。

報告 3 「朱天文・朱天心の日本表象と同性愛—1990年代の作品を中心に」では、日本に亡命していた胡蘭成の影響を色濃く受けていると考えられる朱天文、朱天心姉妹が 90年代に発表した代表作『荒人手記』(1994)、「古都」(1997)を中心に、「外省人第二世代」の作品における日本表象と、(擬似)同性愛との関係を分析し、「同性愛」という他者のメタファーを通じて、彼女たちの台湾政治、社会の変遷への見方を再検討する。

以上三つの観点から、台湾の歴史記憶における日本表象の重層性、日本の歴史記憶における台湾表象の重層性、および日台中文化圏における日台の文化的関係の位置づけを明らかにする。